座談会

立教と戦争に関する研究
――その意義と方向――

〈出席者〉

老川慶喜（司会）　立教学院史資料センター長
立教大学経済学部長・教授
山田昭次　立教大学名誉教授
立教学院史資料センター研究員
大江　満　同志社大学人文科学研究所嘱託研究員
立教学院史資料センター研究員
永井　均　広島市立大学広島平和研究所助手
立教学院史資料センター研究員
豊田雅幸　立教学院史資料センター学術調査員
立教学院史資料センター研究員

立教学院史資料センターの設置と研究プロジェクトの発足

司会：きょうは「立教と戦争に関する研究、その意義と方向」というテーマで、自由な座談会をしたいと思っています。

最初に、立教と戦争の問題を立教学院史資料センターの研究プロジェクト第一弾として立ち上げた理由を述べておいた方がよいと思いますが、この研究テーマの設定は立教学院史資料センターの発足と非常に密接に関係しております。

ここにいらっしゃる方は全員何らかの形で『立教学院百二十五年史』（立教学院百二十五年史編

纂委員会編、一九九六年―二〇〇〇年、立教学院発行）の編纂にかかわっていました。その過程で、やはり今まで立教学院が自校史の編集、資料の収集などにおいて、他校と比べても非常に立ち遅れているという認識が常にあり、『年史』が完成した暁にはアーカイブスを立ち上げたいという話をして、事実『百二十五年史』のメンバーでその準備もしてきたわけです。

そういう中で、大橋英五前総長のもとで「平和の碑」の建設問題が持ち上がったのと関連して、総長から、ぜひ戦時下の立教学院の問題を研究してほしいという要請がありました。それが二〇〇〇年十二月のセンター設置につながったという経緯があると思います。そのころの状況を、中心になって活躍されていた永井さんから口火を切っていただきたいのですが。

永井：はい、ありがとうございます。今、老川先生がおっしゃられた経緯が概要だと思うんですけれども、端的に言って、立教史の中でも戦争についてはこれまで研究が充分になされてこなかったのではないかということと、その前提となる資料自体がきちんと整備されていないというのがやはり大きいですね。つまり、立教史において戦争の時期がより正確な位置づけを与えられてこなかったのではないか、この点が最初の問題意識に上ったのだと思います。

ぜひ戦争と立教について研究をしてほしいという、当時の大橋総長の強い要請の背景には、ちょうど卒業生有志から学内に「平和祈念の碑」を設置したいという要望があって、大学当局としてもその対応を迫られたという事情が内在していました。大学が「平和祈念の碑」を建てることに対してどういうスタンスをとるか、その問題を検討する際の判断材料自体が充分に整っていない。つまり戦時下の立教で実際に何が起こったのかを正確に示す資料が体系化されていなくて、その評価もまだ充分に定まってないのではないかというお考えが大橋総長の頭の中にもおありになったから、まず戦争の問題からやってくれという発言になったと、私は受け止めています。

それと同時にこの要請は、当時の実務担当者である豊田さんと私の関心に沿うものでもありました。われわれが日本近現代史の研究者であり、「戦争と立教」について関心が極めて高かったので、ある意味で大橋総長の要請に対する受け皿が

あったのだとも考えられます。

また、われわれは百二十五年史の事後事務として、編纂終了の直後（二〇〇〇年度）から『百二十五年史資料編』に掲載された資料や未掲載の資料を改めて整理し直して保存するという作業に従事していました。その一方で、大学本部の文書群、具体的に言うと「庶務課文書」（戦前・戦中を中心とする旧制大学時代の公文書など）の整理にも本格的に着手しつつありました。大橋総長の要請とそうした実務の内容とが、ちょうどタイミング的にも一致したということで、初動が迅速になされたという事情もあったと思います。

司会：ありがとうございました。では山田先生、何か『百二十五年史』の編纂からこのセンターの立ち上げ、テーマの選定に至るまでのことで印象に残っていることはございますか。

山田：そうですね。簡単に言ってしまうと、従来の立教学院史を見ていると、立教学院が戦争の被害者であるという一方的な規定だけで終わっています。例えば『立教学院設立沿革史』（菅円吉編集・発行、立教学院八十年史編纂委員［会］発行）。これが戦後一番最初に出された立教学院史で、一九五四年に出されてるんです。その中で八・一五をどう位置づけているかというと、「昭和二十年八月十五日、我が国が無条件降伏をしてから、国内事情が一変したばかりでなく、いろいろ驚異的な変革が行われたが、その間にあって恵まれたのは、我が立教学院であろう。第二次世界大戦中は、米国と特殊な関係があった学校として、更にキリスト教を背景に持った東都における唯一の大学であるために、軍部と官僚から、あらゆる迫害を蒙った。そして、閉校の一歩手前まで追い込まれたが、戦後民主主義の風潮が興隆するに従って、茲に一大進展を見るに至った」（一〇三頁）。

つまり、被害者なんだから、加害者がいなくなれば、ただ元に戻ればいいんだ、という、ある意味では非常に単純な考え。しかし、これはこの本だけの問題ではなく、まだ五〇年代というと日本人の意識が一般にこんなところなんです。同じころに出た『日本聖公会百年史』（日本聖公会歴史編纂委員会編、一九五九年、日本聖公会教務院文書局発行）というのがありまして、やはり戦争の時期を受難の時期と書いてしまっているんです。だから、塚田（理、立教大学総長九四年―九八年、

学院院長九五年―〇一年）さんが、『天皇制下のキリスト教―日本聖公会の戦いと苦難―』（八一年、新教出版社発行）の中で、ただ受難の時代としてだけ受け止めて済むものであろうか、というような問いを発して、彼なりになぜ聖公会が天皇制と妥協してしまったか、妥協するような要因がどこにあったかというのを一つずつ点検なさっていますが、ああいう視点というのが学院史のほうでも必要だろうということを感じたんです。確かに被害者であるということが主要な側面であることは、僕も認めるけど、でもそれだけと言ってしまうとまた問題が残る。

だから私も『百二十五年史』では、資料が充分に見られずまだほんの一部でしかないけれども、一九二五年に軍事教練反対運動を学校当局が押さえ込んでしまったというような資料とか、一九四三年三月に朝鮮人学生に対して生活指導課がもっと時局に協力しろというような懇談会を開く―それから一年もたたないうちに学徒「出陣」で朝鮮人も行ってしまうわけです―そういう資料を掲載して、ようやくその辺に少しメスが入れられたのではないかと思うのです。でもまだほんの少しであって、全面的ではない。むしろ課題は今後に残ったというのが私の実感です。

司会：ありがとうございます。要するに、あの『百二十五年史』を編纂したことによって課題がより明らかに見えてきたということですね。

永井：そうですね。今おっしゃられたのは多分問題の視角、つまり、どう戦争時代を見るのかということだと思います。それと同時に、『百二十五年史』で集めた資料自体もやはりかなり限定されていたのではないかということで、『百二十五年史』編纂の結果、どういった点にまだサーベイが及んでいなくて整理がなされていないのかという、資料面での課題も見えてきたのではないか。

『百二十五年史』の編纂では、時間的な制約に加え、テーマの絞り込みが事前になされていたという事情もあって、資料を収集しながら、同時に掲載候補の選択をしていくというのが編纂プロセスの実態だったと思うのです。従って、当然のことながら、選ばれたもの以外にもいろいろ重要なテーマや資料はあるし、逆にそれをもう一度整理し直さないと、より冷静な歴史の判断はできないのではないか。そういった資料面での課題もかな

り浮き彫りになったわけです。だから研究プロジェクトの「趣旨」も、研究の前提になる資料を系統的に収集してさらに整備をする、学内の人だけではなく、外の研究者もアクセスできるような整備をするということに重きが置かれているのです。

司会：ありがとうございます。キリスト教史の方から『百二十五年史』の編纂を見られて大江先生、何か感じたようなことはありませんか。

大江：私は『ウィリアムズ主教書簡集』（『百二十五年史資料編』第4巻、第5巻）の解題を依頼されて最後に参加させていただいて、編纂には関与していませんから分かりませんけれども、印象としては、全部で五巻ある『百二十五年史』資料編は、明治期、大正期よりもかなり戦後のほうに枚数が取られている、それから大学への比重がちょっと少なくて、小・中・高の枚数が多いというような印象がありました。

それから、一人の方の責任編集ではなくて共同編集・執筆という形をとっておられるので、どういう観点から資料を読み込むかとか、どのように資料を見るのかという点では、やはりちょっと分散傾向があるような……。それは、一つはいい点でもあり、もう一つは、大学当局、立教としての見方にまだはっきりと至っていない、途上の段階かなということも言えるかもしれません。ただ、一つの資料を選択するにもそこには主観が入り、資料を選ばないということも一つの選択がなされていますので、それはそれで客観的にいろいろ見たりできるので、よかったのではないかとも思いますけれど、その資料に対する解説、解題というのはあまり深くなされていないような気がします。

先行研究と他大学の動向

司会：ありがとうございました。では次に、われわれの研究プロジェクトのテーマ、立教と戦争についての研究がいままではどの程度行われてきたのか、どんな実例があるのかなどについて、これも実際にプロジェクトの立ち上げに直接携わった永井先生から少し紹介していただきたいと思います。

永井：従来の研究というのは、学院のいわゆる公式の年史と個人研究者による研究の二つに大別できると

思います。あとはその材料になったような体験者の回顧録などがあります。

学院における歴史書については、山田先生が先ほどおっしゃった『立教学院設立沿革史』が端緒となっていて、それを踏まえて『立教学院八十五年史』（立教学院八十五年史編纂委員編、一九六〇年、立教学院事務局発行）、さらに『立教学院百年史』（海老沢有道編、一九七四年、立教学院発行）、そして『百二十五年史』（ただし、全六巻のうち五巻が資料編で、通史的な要素を若干持つものは六巻目に当たる図録のみ）、その四つと考えることができると思います。『沿革史』についての性格は山田先生に今おっしゃっていただいた通りだと思います。そして、それを踏まえて書かれた『八十五年史』が戦争について本格的に検証した初めての公的な著作と考えることができます。具体的には十五章と十六章、十九章（「軍事教練」、「学院の試練」、そして「太平洋戦争と学院」）で戦時下の状況が扱われています。当時の学内状況を羅列しながら、印象とかエピソードを挿入するパターンが多いのが特徴です。この筆者自身がその戦時下を生き抜いた人たちで構成されていますので――たとえば元中学校校長の帆足秀三郎先生（立教中学校校長一九三六―四五年）など――、体験的な回想録という性格もあるのではないかと思われます。

一方、『百年史』は海老沢有道教授（一九三四年卒、立教大学教授、在職一九四九―七六年）が編集されました。日本聖公会が成立する過程やウィリアムズ伝等々、初めて本格的にアメリカの資料に依拠して書かれており、そこは白眉だと思うんです。それと同時に、叙述になるべく典拠を示すことを編集方針にされたようで、これも後世、私たちにとっても非常に参考になりました。この『百年史』でも、戦時下についていろいろな側面から概観されています。林英夫先生（一九四三年卒、立教大学教授、在職五五―八五年）や宮本馨太郎先生（一九三五年卒、立教大学教授、在職四二―七七年）など、戦時下を学生としてあるいは教員として過ごされた方が筆をとっておられるので、やはりどんな状況だったのかということを個人的な視点を踏まえてお書きになっているのではないかと思われます。

それと同時に、学内の公文書がほとんど使われていないので、こういった資料的な制約が叙述に与える影響も当然少なくないでしょう。たとえば、

立教当局の主体性、政策意図などは具体的に知ることはできません。現象面はわかるんですけれども、戦略、動機などがわからないので、結果として、「時代に抗し切れなかった立教像」という、『沿革史』が示したようなイメージがここでも敷衍される傾向にあるのではないかと思われます。

『百二十五年史』では、こういった先行研究の蓄積を踏まえて、特にこれまで門外不出の状態にあった学内の一次資料（学院でいうと理事会記録、大学でいうと教授会記録、総長日誌、あるいは中学校でいうと教務日誌など）を収録しました。こういった資料が学内に残されていることを内外に示したという点でも、意義は非常に大きかったと思います。さらに戦時下の医学部設置構想が何故に起こったのか、あるいはアメリカ研究所がいかなる背景のもとで創設され、戦時下どのような活動をしていたのか等々、従来充分に検討されていなかった史実とその背景の解明というのも、資料の発掘・整備とともに徐々に可能になりつつあるのではないかと感じます。『百二十五年史』では幾つものテーマが立てられていまして、学生・生徒の生活実態を示すようなものも取り上げられています。

以上が、学院の年史の大雑把な概要ですが、その一方で個別、個人研究者による研究も行われています。この先鞭をつけられたお仕事は、立教学院の嘱託として『百二十五年史』編纂の初期の準備をされ、その後、東京大学助教授となられて先年お亡くなりになった中野実さんの研究がそれに当たると思います。

一九九一年には、「昭和戦前期の私立大学―立教大学の場合」と題する研究ノートを『立教大学教育学科研究年報』三十五号に発表されております。中野さんはその後も、九六年に「戦時下の私立学校―財団法人立教学院寄附行為の変更を中心として」という論文を発表、財団法人立教学院の寄附行為の変更を系統的に追われ、戦時下の寄附行為第二条の変更問題についても触れられていました。これも『立教大学教育学科研究年報』の第三十九号に掲載されております。

あとは、寺﨑昌男元立教大学教授が、「進学案内書・受験雑誌にあらわれた立教学院」という、まことに興味深いテーマで『チャペルニュース(CHAPEL NEWS)』（一九九三年、九四年、四一八、四一九、四二八、四二九号、立教学院諸聖徒礼拝堂発行）に連載されていますけれども、ここ

でも、ごくわずかながら戦時下について触れられております。さらに、ここにいらっしゃる山田昭次先生も積極的に筆をとられておりまして、とりわけ立教大学出身の朝鮮人学徒兵について研究をされ、その成果を『チャペルニュース』に発表されています（「立教大学出身朝鮮人学徒兵について」九四年、四三〇号、「〃（続）」九五年、四三一号）。一九九七年には「立教学院の歴史のなかの朝鮮人学生と戦死者タブレット」と題する論考を雑誌『立教』一六一号に寄稿され、非常に貴重な先行研究になっています。

このほか、豊田さんと私の二人で、雑誌『立教』の連載欄「立教史発掘」で戦時下の幾つかの側面について発表しています。要するに、個別テーマを取り上げ、新たに発掘した内外の一次資料によって裏づけて検証していくことが、最近の傾向としてあるのではないかと思います。

司会：ありがとうございました。では次に、他大学の研究動向について少しお話ししたいと思います。慶應義塾大学、青山学院、明治学院などが参考になったと記憶しますが、永井先生、いかがですか。

永井：他校の年史では、当然、戦争の時期についても触れられています。年史以外で戦時下に焦点を当てた研究となると、学校で公的に行ったものとしては『心に刻む—敗戦50年・明治学院の自己検証』（明治学院敗戦50周年事業委員会編、一九九五年、明治学院発行）と『東京大学の学徒動員・学徒出陣』（東京大学史史料室編、一九九七年、東京大学発行）が挙げられます。前者は「戦争責任・戦後責任」という観点から、戦時下の明治学院の再検証を試みたものです。後者は中野実さんが中心になって編まれた学術書で、学内公文書を博捜、整理した大部な資料集に「動員と出陣」の時代背景に関する論文数本が付されています。今後、他大学もこういった戦時期資料の体系化が要請されると思いますけれども、その先鞭をつけた労作として高く評価したいと思います。

また、青山学院大学の雨宮（剛、経営学部教授）先生を中心とする「青山学院大学プロジェクト95」が一九九五年から一連の研究成果を発表されていることも見逃すことができません。一九九五年の『青山学院と出陣学徒—戦後50年の反省と軌跡』（私家版）を皮切りに、九八年に『青山学院と平和へのメッセージ—史的検証と未来展望』（同）、

二〇〇〇年に『青山学院と戦争の記憶—罪責と証言』（同）、そして二〇〇一年には『青山学院と地の塩たち—建学の精神と21世紀への祈り』（同）を出版されております。これはいわゆるオフィシャルなものではないんですけれども、体験録やインタビュー、座談会などを収めているものとして大変参考になります。

このほか、特に注目すべき研究は、慶應義塾大学の白井厚先生が中心になって編まれた『共同研究　太平洋戦争と慶應義塾』（一九九九年、白井厚監修、慶大白井ゼミ著、慶応義塾大学出版会発行）と『大学とアジア太平洋戦争』（一九九六年、日本経済評論社発行）です。とりわけ後者の『大学とアジア太平洋戦争』は重要だと考えています。その理由は、「戦争史研究と体験の歴史化」という副題に示されている通り、単に慶應大学を取り巻いていた状況を説明するだけでなく、ミッション・スクールを含む他大学の動向にも併せて分析のメスを加えていることです。同志社、上智が入っておりますし、あるいは朝鮮出身学生の状況についても触れられています。さらに興味深いのは、海外の大学の戦争への対応についても触れられている点で、ハーバード大学、ハイデルベルク大学、モスクワ大学の三つの大学の事例が紹介されています。今後の比較史、比較研究の方向性を明確に打ち出したものとして非常に示唆するところが大きいのではないかと感じております。

司会：青山学院大学のこの三冊は、大学として出版しているんですか。

永井：大学ではないですね。したがって、年史以外で大学として戦争について取り組んだのは、目につくものとしては明治学院と東大のものですね。

司会：では大江先生、同志社大学のほうはいかがでしょうか。

大江：戦時下については、最近は出ていないような気がします。三十年ほど前に『戦時下抵抗の研究』Ⅰ・Ⅱ（一九六八年、六九年、同志社大学人文科学研究所編、みすず書房発行）と、『特高資料による戦時下のキリスト教運動』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（一九七二年、七三年、同志社大学人文科学研究所／キリスト教社会問題研究会編、新教出版社発行）という成果がありますけど、それ以降は、同志社と

いうよりも日本基督教団の資料集を、九七年から五巻出しておりまして、その『日本基督教団史資料集』一・二巻（一九九七、九八年、日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編、日本基督教団宣教研究所発行、日本基督教団出版局）は戦争に関する特集で、プロテスタント諸派の動向なども大分カヴァーされていると思います。

欠けていた〝加害〟という視点
―日本聖公会の動向と立教

司会：さて、そうした研究を踏まえて、現にもう研究プロジェクトは動いていますけれども、先ほど山田先生から、これまでの立教史、聖公会史の記述において加害者という視点が欠けていたという問題についてお話しいただきました。この辺について、大江先生、キリスト教史、聖公会史研究の観点からご発言いただけますか。

大江：キリスト教史の中でも、山田先生の問題意識のように、被害者としてではなく加害者として自らその責任を明らかにする、批判的に顧みるという態度は、戦後すぐにではないですけれども、〝教団の戦争責任〟として見られることですし、研究者の間にもそういう傾向が主流としてあります。

それはそれでいいと思うんですが、見落とされがちなのは、要するに日本のキリスト教会やミッション・スクールといった団体が、キリスト教が掲げる平等、博愛といった理念よりも、むしろキリスト教そのものが非常に強く持っている体制的な部分を取り入れたということなんです。

ローマ時代から現代アメリカまで、キリスト教は国とかかわってるんですね。しかも体制的な宗教として、世界の中でも席巻しているような、経済史でいえばヘゲモニー国家のような国がキリスト教と結びついている。そうして広がっている。

それから「文明の宗教」ということで非常に文明力を誇示して、進攻地を野蛮や未開というふうに位置づけて、その対比的な構造の中で入っていく。

そういった中でキリスト教が日本にも入ってきたときに、日本人はそのキリスト教の体制的な部分とか文明の部分を受け入れたわけです。キリスト教の理念としてはもちろん平等理念と普遍主義的なところが核としてあるんですけれども、日本人が信徒になったりする場合も、そういった体制的な部分とか文明力を誇示した部分を受け入れて

いる。それを、歴史的研究の中でちょっと見過ごしてきているのではないかというのが、印象としてはあります。

明治時代から、ミカドの帝国として日本が近代化していく中で、たとえば国が天長節、紀元節などを新しい祝日・祭日として作ったときに、最もそれを忠実に実行していったのが教会であり、ミッション・スクールだった。そういう体制的な素地というものがもともと教会にはあるのです。「教会やミッション・スクールは、本当は平和団体なのにそれに反して昭和の軍事主義の時代に迎合した」、というのではなくて、もともとそういう素地があるという部分。そして受け入れる側も最初は士族が多いわけで、国士的な人たちが入信しているということがありますから、その部分をまず押さえておくことが必要ではないかと思います。

山田：大江先生のおっしゃっていることに関連して、「これはどうなんだろうなあ」としきりに思っていることは、日本聖公会の創立総会が始まるのは一八八七年二月十一日、つまり紀元節の日なのです。これは、わざわざ選んでやったのかと。

大江：これは関係ないです。ウィリアムズ（立教学院創立者、米国聖公会日本伝道主教）とビカステス（英国国教会日本主教）がその開催日をいつにするかというので、四日、五日の幅がある中で、急に延長したり変更したりしてそこに入った。ですから、後からそこの二月十一日に当たる部分を……

山田：彼らは拡大して強調していますよね。

大江：ええ、拡大解釈したようなことは考えられますけれども、もともと宣教師の意識の中ではそういうものはないんです。

ただ、天長節とか紀元節というのはもともと日本にない祭日ですよね。祝祭日は、それまでは氏神の祭礼であったり、縁日だったり、五節句だったりしたわけです。建国日とか、天皇や皇后の誕生日とか、そういう祭日は明治まではなかった。だから、民衆の感覚としては非常に不自然なんです。でもそれはキリスト教がずっと外国でやってきたことですから、それをミッション・スクールや教会の中でやるということで、最初から何の抵抗もなく祝っていったということがあります。ま

た、天皇に対してもそうです。要するにキリスト教国の皇帝像にならって、それと同じように決めたというところがありますから、本当にそのあたりは不思議なほど抵抗感がないです。

司会：以前、山田先生から韓国のキリスト教は抵抗の宗教であったというようなお話を聞いたことがあります。アジアの国が西欧の宗教であるキリスト教を受容した場合、その受容の仕方は日本と韓国でかなり違うということでしょうか。

山田：韓国のクリスチャンだっていろんな人がいるから一概には言えないんだけど、でも私が池明観先生から聞いた話によると、戦争中のあの厳しい時代に、牧師さんが子供に洗礼をする際に「あなたはモーゼのような人になりなさい」とよく言っていたといいますね。それは、民族解放とかかわらせて聖書を読んでいるのです。そういう意味では旧約聖書がよく読まれたといいます。

キリスト教は、三一運動で重要な役割を果たしました。それから戦後の民主化運動でも、キリスト教というのは非常に戦闘的な役割を果たしてきていますよね。だから、日本のように植民地宗主国になっていった国と植民地にされていった側では、聖書の読み方自体もかなり違うのではないかと思っています。

それから、神社参拝しなかった人の記録を読んでいたら、神というのはキリスト教の神しか認めないので、日本の天皇は神と思わないからどうしても神社に頭を下げられなかったと。ある意味では非常に単純といえば単純だけど、でも本当は単純なところに真理があるんで、韓国人だとそこを頑固に固執する人が出てきてしまうんです。その辺の違いをどう考えたらいいのか。

今度、僕は少し『基督教週報』（日本聖公会発行）といったものを読んでみたんですが、「キリスト教は反国体的だ」とか「反天皇制だ」とかいってやられるものだから、むしろ、「いや、そんなことはない、キリスト教ほど愛国的なんだ」と逆に過剰忠誠になっていってしまうような傾向が見えてくるんです。

たとえば元田作之進（立教中学校校長一八九九―一九二三年、立教大学学長〇七―二三年、邦人初の主教）が、『基督教週報』の三十四巻の十号、一九一六年（大正五年）十一月三日の論文で、「世人ややもすればキリスト教を誣いて我が国体

に合致しあたわざるものかのごとく言わんとす。この際吾人は事実においてキリスト教徒なるがゆえに他に優りて君と国とに誠忠なるゆえんを示さざるべからず」と。つまり、キリスト教ほどもっと愛国的行為を示さなければいけないんだというのです。

それから、特に紀元二六〇〇年のときはこれが強調されたようで、「一聖職の手紙、二六〇〇年奉祝記念事業」という、『週報』の八十巻三十五号、日付でいうと一九四〇年（昭和十五年）の十一月二十二日に掲載された短い文章なんですけれども、「耶蘇教『にも』や『でも』ではない。耶蘇教『でなければ』、できない、皇国に対する『貢献』を、堂々と、見せることである。」と記されています。耶蘇教だからこそできるような天皇制国家に対する忠誠を示さなければいけない。やられるものだから余計に過剰忠誠になってしまうという面、一歩譲ると益々深みに入ってしまうという状況があるのではないか。

もちろん韓国だって全部がそんなに戦闘的にやったというわけではなくて、数からいえば少ない。でも少ないなりにそういうのが出てくる。日本ではなかなかそういうのが出てこないというのは何なんだろうか。やはり置かれた歴史的状況の違いかなと、今のところは考えています。

大江：韓国と日本では、今おっしゃられたこともそうですけれども、キリスト教を宗教として受け入れたか受け入れないか、根づいたか根づかないかという違いがあると思うんです。

朝鮮にキリスト教が入ったときは、宗教が民衆にあまり根づいてない空白期にあたるんです。仏教はもう衰退してしまって、儒教は宗教という機能を果たしていない。そういう民衆の中で、一番浸透していたのがシャーマニズムでした。韓国のシャーマニズムは、儒教も仏教も認めていますし、汎神論のはずなんですがなぜか最高神があります。ハンニムというんですが、それを、キリスト教は唯一神とみなすことをＯＫした。要するにキリスト教が教義的に大分譲歩しているのです。それで、神の呼称も同じものになり、接近していくということで、教義的な部分の接近が一つあると思います。

それからもう一つは、宗教的な要素をキリスト教が担った。山田先生がおっしゃったように、民族的な抵抗運動の核というのがある。要するに救

済宗教。民族の危機に対してキリスト教がかなりその抵抗の主体となって機能したというのがある。

この二つがかなり大きいということで、現代韓国において見られるように、キリスト教は宗教として根づいていると思うのです。

ですから韓国は、日本のような華やかなクリスマスではないですよね。

日本には文化としてキリスト教が入っていると思うのです。神道と仏教がかっちり国民的な宗教として地域の祭礼とか個人の葬祭儀礼を押さえているので、なかなか宗教として入れなかった。「知的な宗教」とか「文明の宗教」とか、そのあたりで、受け入れた側は頭ではかなり理解しているけれども、生活などの中での浸透というのがなかなかないんです。

永井：今のお話は、戦時下の日本聖公会とかミッション・スクールの対応というのは近代日本におけるキリスト教の受容プロセスに規定される側面があって、国策に「迎合」する素地をそもそもはらんでいたのではないか。だからこそ戦時下の立教について研究をしていく上では、キリスト教受容という歴史的条件の検討も不可欠であるという、研究の方向性、課題をかなり的確に指摘していただいたと思うんです。こうした長い歴史的文脈という視点も踏まえた研究でなければ、立教史における戦争の時代をより正確に描くことはできないのではないか、そういう分析の視角・方法論に関する提言とも受け取れるお話だと思います。

山田：私も今度この「紀要」に載せる論文を書いて思ったのは、立教学院像を見ていく場合に、やはり聖公会の動向というのを視野に入れていかないといけないのではないかということでした。これまで、それが大分欠落していると思います。やはり立教学院の、特に首脳部は聖公会に直結していますから非常に深い関連があるんだけど、どうもそれが今まで、僕の意識から抜けていたのではないのかなという気がしました。

具体的なところで言うと、特に紀元二六〇〇年のときなんかは、立教学院の動向は聖公会の動きとかなり密接なのではないかと思うことがいろいろあるんです。たとえば、一九四〇年一月発行の『立教学院学報』に、当時学院総長だったライフスナイダー（立教学院総理一九一二―三一年、同

総長・理事長三一―四〇年）の「新年の辞」というのが載っているんです。これは従来はあまり注目されてなかったんですが、読んでみるとかなり大きな意味を持っています。

長くなりますから要旨だけ言いますと、紀元二六〇〇年ということを非常に意識しています。つまり、「『神と祖国の為』というこの偉大な理想が、皇紀二六〇〇年紀念の此の年に際し、全学生、全校友の生活において実現せらさるべきことを促さんと欲する。」と強調されています。

具体的には祖国のために何かというと、「この千載一遇の秋に当り、諸君の祖国は、諸君が新東亜建設のために一心合体しての諸君の協力を要求する」。つまり東亜新秩序建設のために、君らの祖国が君らの協力を要求している。そして、「諸君の母校も」と言っていますから、つまり立教学院もその方向に向かって諸君が「奉仕と犠牲を行うことを要求する」と言っているわけです。

この新東亜建設というのは、近衛内閣が一九三八年に言っている東亜新秩序建設です。この内容を簡単に言うと、「国民党政権が共産党と手を切って日本の軍門に下れば、日満支三国で仲よくやっていこう」ということで、これがやがて四〇年に大東亜共栄圏構想に広がっていくのです。

それからもう一つは、この年の十月にライフスナイダーが理事長および学院総長を辞任する。それで松井米太郎（立教学院理事長一九四〇―四三年）という人が理事長に就任しまして、誓詞（誓いの言葉）を書いて、これに全理事が署名をしている。これは短いから読んでみますと、「誓詞。我等理事一同は、現下内外の情勢を考え」、内外の情勢というのはまさに紀元二六〇〇年で大東亜を建設しなければならないということです、「教育報国の任務愈々義務重大なるを認識し、茲に態勢を新にして出発せんとするに方り、衷心立教学院創立者の理想を銘記し、基督教的精神を持って滅私公に奉じ」、このときは立教学院で滅私奉公という言葉がはやるのです。それが、キリスト教で言う「犠牲」というのとダブっているのです。「誠心事に当り、神と国との為に協心戮力せんことを誓う」。ここで、神と国が出てきています。日付は「皇紀二六〇〇年十一月五日」です。

松井米太郎が相当意気込んでいるので、僕は、松井がこのころ何をやっていたか調べてみた。そうしたら、この方は東京教区の監督（現在の主教）なんですけれども、皇紀二六〇〇年の祝典にかな

り力こぶを入れた指導者なのです。それからもう一つ、この方は満州中国伝道に非常に熱心な方だった。華北伝道に関しては、第十九回聖公会総会で、当時はいわゆる北支といいましたが、北支伝道を決議している。ですから、ある意味では松井さんというのは当時の聖公会の先端部分を行った人で、その方が理事長になると、神と国との名前で全理事に誓詞を出させる。

そういうふうに、聖公会の動向を見ていかないと、立教というのはなかなかとらえにくいなあと思いました。

大江：聖公会の戦時下の問題でいいますと、キリスト教諸教派に対して、プロテスタントで一つ、カトリックで一つにまとまってくれという、政府からの教会合同問題が起こったときも、聖公会はカトリックとプロテスタントの中間のような性格がありますので、初めは独自に一つの教団をつくる方向で動くんです。しかしどうもそれができないとわかってきたときに、日本基督教団（プロテスタント）のほうに合同する側と、非合同を貫く―と言うことは宗教団体と認められないわけですから、治安維持法違反でどんどん弾圧される可能性があるわけですけれども、それでも非合同を貫くという二つに分かれるのです。

当時、日本聖公会の諸監督は、初めは非合同が大勢だったんですけれども、四二年九月、大阪教区が合同すると言い出した。それに対し、非合同を貫く七監督の声明を出そうとなったとき、松井米太郎東京教区監督も初めはそれをＯＫしていながら、反転して合同するほうに回っていくのです。結局日本基督教団のほうに、松井監督と、名出保太郎大阪教区監督、柳原貞次郎補佐監督の三人で入っていく（六監督は非合同を堅持しました）。

積極的に合同するということは、ある意味で国策に沿うということになるんですけれども、立教関係者はほとんどその合同派なのです。ラジカルに運動をした教会合同期成同盟の会長をやったのも、杉浦貞二郎（立教大学学長事務取扱一九二三―三一年、学長三一―三二年）です。

永井：要するに、立教の学内状況の活写や分析だけでは不充分で、実態とその意味づけはできないのではないかということですね。つまり立教を取り巻く歴史的あるいは社会的な環境（歴史的というのはキリスト教の受容の時期まで多分さかのぼらない

と理解はできないんだろうと思うんですけれども…）と合わせて分析しなければいけない、ということだろうと思うんです。

そのためには、いろいろな課題があって、たとえば日本聖公会やアメリカ聖公会本部の動向分析は不可欠であろうし、文部行政がどういう戦略意図で戦時中の一連の政策を打ち出していたのかというのも当然トレイスしないと、立教のリアクションの意味というのはわからないでしょう。さらに他校の状況はどうであったのかという比較分析の視点も必要です。いろいろな側面から検討しなければ、戦時下における立教の出来事の意味というのは、本当にはわからないのではないかと思います。

「立教と戦争」をとりまく資料状況

司会：さて、先行研究を踏まえ、他大学の動向も参考にしながら、そうした多角的な視角をもって研究プロジェクトを進めていくわけですけれども、ではその際に、われわれがいまの時点で目にできる資料、そして今後利用できる形に整備していかなければならない資料というものがあります。その辺についても、ながらくセンターの前身の「百二十五年史編纂室」で資料整理に携わってきた永井先生から。

永井：それでは、立教と戦争に関する資料状況について一次資料（その当時書かれた資料で出版されていないものを主に指します）を中心に説明させていただきます。まず学院では「理事会記録」が政策決定過程を探る上での基本資料だといえます。これは文部省など対外的に提出する可能性があるためか、非常に簡略でありまして、日本語版が正文です（手書きの英文版も存在します）。それぞれの年度で学院・各校がどういう事業を行ったのかを示す「事業報告」も、一九三一年から作成されています。一九三一年というのは、立教学院が財団法人として出発する年でありますが、「事業報告」はこの年から四二年までのものが確認されています。「理事会記録」については一九三一年から敗戦までの時期がすべてカヴァーされています。

あと大事なのは、官公署往復書類といって、文部省その他とのやりとりの公文書を綴じたものがあります。これは残存状況が充分ではないんですけれども、貴重な情報源の一つです。

私が最も重要なものと考えているのは、戦時下にライフスナイダーの後を受けて学院総長に就任した遠山郁三（立教大学学長一九三七―四三年、学院総長四〇―四三年）の「日誌」です。これは業務日誌としては非常に詳細なものでありまして、一九四〇年からお辞めになる四三年一月まで書かれていて、現在プロジェクトで復刻の準備を進めています。首脳部の考えや政策決定過程を論ずる上で極めて重要な情報を含んでおり、その意義を特に強調しておきたい資料です。

大学の資料としては、三辺金蔵（遠山学長の後任として立教大学学長［のちに総長］事務取扱一九四三―四四年、大学総長四四―四五年）の秘書が書いた「学事日誌」というのもあります。大学部長会の記録もありますし、文学部の教授会の記録も一九四一年五月から四三年の一月分までがありまして、これらについては『資料編』の第1巻に抄録しています。ほかに大学の資料として重要なのはカール・ブランスタッドやオーバートン、スパックマンといった宣教師の文書と「庶務課文書」です。後者については戦前期、旧制時代についてはすべて整理が済んでおり、目録もできています。

学生の動きを知るには、『学生生活調査報告』というものが、一九三八年と四一年の二年分出ていて参考になりますし、立教関係戦没者の慰霊祭に関する資料や、アメリカ研究所に関する資料も学院史資料センターに保存されております。

中学校については、「教務日誌」をはじめ、勤労動員に関係する書類、あるいは官公署の往復書類がありまして、これは中学校の「史料室」に原資料が所蔵されて、学院史資料センターにはそのコピーがあります。

学外資料として重要なのは、許認可関係のものが国立公文書館と東京都公文書館にそれぞれ所蔵されているということと、これに増して大事なのが前述とは別の宣教師文書です。

これについては大江先生から詳しく紹介があると思うんですけれども、各地に派遣された宣教師からニューヨークのアメリカ聖公会本部に送られた書簡を主とする「ジャパン・レコーズ（Japan Records）」がそれに当たります。オリジナルはテキサス州オースティンのアメリカ聖公会文書館にありますが、そのコピーが日本聖公会管区センターにマイクロフィルムの形で所蔵されております。これは明治時代から一九五三年ぐらいまでカ

ヴァーするもので、戦争のみならず、立教の歴史を語るには、この文書群の分析は外せません。

国会図書館の憲政資料室が所蔵する戦後のＧＨＱ（連合国軍総司令部）文書にも立教にまつわるものが散見されます。たとえば、戦後中佐として再来日を果たしたポール・ラッシュ（立教大学教授、在職一九二六年―四一年）を中心に、戦後すぐに立教の幹部に対して教職追放という処分がなされました。三辺金蔵大学総長をはじめとして、幹部十一名が職を解かれるわけです。この措置にまつわる資料がＣＩＥ（民間情報教育局）の文書の中にあります。これは「スタッフ・スタディーズ」というタイトル・フォルダーで、特に「リッキョウ・ユニバーシティー」というタイトルが与えられているもので（"Staff Studies - Rikkyo University"）、マイクロ・フィッシュのシートでいうと五枚ほど、かなりの文書群だと思いますけれども、それが保存されております。なお、ラッシュの個人文書は清里（山梨県）のポール・ラッシュ記念センターが所蔵しており、貴重なコレクションとなっています。

ＧＨＱ文書にはまた、立教の軍事教練を担当していた配属将校、飯島信之大佐に関する資料もあります。飯島大佐は戦後すぐにいわゆる戦犯容疑者の指定を受けて逮捕されるという事態になるわけですけれども、十一月に胃がんで亡くなります。ＬＳ（法務局）の文書の中にその逮捕にまつわる資料が残っております。これは確認してみましたけれども、日本政府に対して逮捕を要請するＧＨＱ側文書と、日本人医師による診断書が含まれていました。そういった、もともとはアメリカの国立公文書館にオリジナルが保存されているものにも、立教関係の資料が含まれているということです。

以上、文書資料を中心にお話ししましたが、視覚的な資料として、大学・中学校の卒業アルバムがありまして、ここからも当時の時代状況というのはかなり窺い知ることができるのではないかと思います。また、宮本馨太郎先生旧蔵のフィルム映像も、一九三〇年代の池袋と立教大学の学内状況を示すものとして貴重です。

このほか、文書資料を補う素材としてインタビューも大事だと思います。たとえば、立教中学校の元教諭の伊藤俊太郎先生が、戦時下、経済学部の教授であった縣康教授（立教大学教授、立教高等学校校長五八―七一年、七二年立教英国学院創

設）にされたインタビューは非常に具体的に当時の学内状況を伝えておりまして、どういう圧力のもとで寄附行為や学則から「キリスト教主義」という文言が削除される事態が発生したのか、学院総長の遠山郁三さんが当時どういう発言をされたのかなど、従来知られざる史実を証言されております。

あとは、戦時下学生として過ごされた方々については、豊田さんと私と山中さん（立教学院史資料センター課長）とで、数人インタビューをしております。当時、立教で学生生活を送られた朝鮮半島出身の方については、山田先生がインタビューを長年とられておりまして、これについては山田先生から後でコメントがあると思います。

学内外の資料状況をスケッチすると概ね以上のようになると思います。

司会：では「ジャパン・レコーズ」について、大江先生。

大江：「ジャパン・レコーズ」というのは、アメリカ聖公会からアフリカ、ギリシア、中国、日本、南米、その他各地に派遣された宣教師がニューヨークの本部にあてた書簡群の内の、日本宣教師の分です。往復書簡ではないので、本部の主事がどう返事したかというのは、部分的にしか入っていません。したがってそれを使用するときには、主事がどう反応したか、返信したかということと重ね合わせてみないといけない。今言われたように、一八五九年、日本に対しては開国、開教したときから戦後すぐぐらいまでの範囲を網羅しています。非常に貴重な資料なので、これはぜひとも将来的にプロジェクトを組んで、分担して解析する研究に値する。同志社大学人文科学研究所はアメリカンボードの研究としてそれをもう十何年やっています。大人数でやってるんですけれども、まだ明治中期までです。

永井：ジャパン・レコーズとリンクする形で「スピリット・オブ・ミッションズ（The Spirit of Missions）」誌（アメリカ聖公会内外伝道局発行）もやはり使わなければいけない。

大江：そうですね。これは基幹資料です。

永井：これは、大江先生からもご教示いただいたのですが、宣教師による投稿記事だけではなく、海外伝

道中の宣教師が本国にあてた手紙を編集したものもありまして、本国の伝道方針に都合の悪い部分が編集の段階で削除されている可能性もありますから、この点については注意して読むべきものだと思います。なお、「スピリット・オブ・ミッションズ」は一九三九年十二月から雑誌名が「フォース（Forth）」に変わります。

大江：資料としては、「スピリット・オブ・ミッションズ」誌などのように、宣教師の原文と突き合わせることによってどう判断したらいいのかが問題になることがあります。それを補佐するような資料として、いくつかのものが考えられます。

まず、手書きの大きいものでコピーが出来ないのですが、オースティン（アメリカ聖公会文書館）にしかない外国委員会の議事録です。外国委員会が各宣教師にどう対応したか、外国委員会の決議がどう出されたかが分かる。これが一番基本的な原資料に入るものだと思います。

それから、こちらは印刷物になっているんですが、「アニュアルレポート」（年報）というのがあります。それは多分コピーできると思います。

それから、アメリカ聖公会は三年に一度ジェネラルコンベンションという総会をしますから、その記録ですね。

ですからそれらの資料と、宣教師の書簡や「スピリット・オブ・ミッションズ」の記事を、全部重ね合わせて、一つの問題について長いスパンで見ていくと、現地のことや政治の状況だとかがかなり分かります。

もう一つ、聖公会に関して大切なのは、日本聖公会がほかのプロテスタントの教派とちょっと違って、米英混合だという点なんです。

日本に入ってきたほかのプロテスタントは、ほとんどアメリカが主流なんです。ところが聖公会は、最初にアメリカが入ってくるんですが、後続したイギリスの方が団体や宣教師の数が多い。だから日本聖公会というとイギリスのイメージがあるのです。アメリカ聖公会は、イギリスの三分の一ぐらいの数なんですけれども、しかし、日本聖公会の組織や法憲法規の基本を担っているのがアメリカ、つまり運営や制度の実質はアメリカなんです。そして英米それぞれの傘下に日本人信徒がいますから、教育事業などでもお互い協力しないんです。そういったイギリスとアメリカのねじれ現象が日本聖公会にはあるんです。

ですから立教も聖路加（国際病院）もアメリカ単独の事業で、イギリスの援助を請わずにやらなくてはいけない。教育事業も医療事業もほかの教派と競合していますから、そういう中でアメリカ聖公会本部が昭和前期には諸派のなかでも一番多くのお金を日本に投入しています。

日本聖公会の地方部や教区というのも、アメリカとイギリスそれぞれの系統に分かれているんです。そしてそれらがどちらに属するのかが、戦時中の問題とも関係してくるので、そのあたりの背景というのは、資料を読み解く場合に非常に重要です。

司会：どうもありがとうございました。山田先生、朝鮮人学生のインタビューはどうですか。

山田：ええ、今回の出張では三人インタビューしました。以前に学徒兵は聴いてるんです。ただ、やはり全体を把握しているかどうか、全然自信がないんです。学生でも運動圏にいた人といなかった人の違いというのはかなりありますよね。ところが、現在のところ運動圏にいた学生さんとのインタビューはできてないんです。

ただ、今回のインタビューで、意外な言葉がありました。戦時体制の中で立教に行って、自由でよかったと言うのです。結局それは何だったのかというと、植民地だった朝鮮との比較なんです。あのころですと、朝鮮の左翼でも、朝鮮では出版できないものを日本へ持ってきて出版したりした。やはり植民地と植民地宗主国では弾圧の度合いが違うんですね。だから吉野作造が三一運動の後、朝鮮に対して最小限度の改革要求というのを出すんだけど、せめて「内地」並みの言論の自由を与えよ、と言ってるんです（笑）。かつて若いころそれを読んだときは、何だこの程度のことか、と思ったけど、その程度というのがなかなか実は大変だったということを、今度実感しました。

ただし、大学から一歩外界へ出ればまた別な話で、下宿を変更した場合には警察に届けないといけなかったし、いろんな人の話に共通する点は、やはり玄海灘を渡るときが非常に大変だったことです。つまり釜山と下関で警察官に徹底的に尋問やられるんですって。インテリゲンチャーは特に危ないというので、相当突っ込まれていろいろ聞かれたそうです。ただし、立教の学生というのはおとなしいといわれていたために、ほかの大学の

学生ほどはうるさく言われなかったと言っています（笑）。でも、やはり植民地は厳しかったんだなあというようなことですね。

パク・テジン（朴泰鎮）先生は、自分は予科から入ったから日本人のいい友人を発見できた、しかし専門学校を出てから立教大学へ編入して学部に入る人は、わずか三年間だから、日本人との関係では孤独ではなかったかと思う、と言うんです。どうしても朝鮮人だけでごそごそ集まってしまう傾向があったと回想しておられました。それを言われてみると、詩人ユン・ドンジュ（尹東柱、一九四二年四月から十二月まで立教大学に聴講生として在学した）が立教の便箋に「六畳部屋はひとの国」と書いていた心境が少し見えてきたような気がしました。

これは相当水準の高い人で、中国の大学に行ってから立教に入ってきたイ・ヨソン（李如星）という人がいます。この人は一九二三年から一九二六年まで立教大学に在学しました。在学中に『立教大学新聞』に朝鮮の民族解放運動の動向について寄稿しました。卒業してから『数字朝鮮研究』という本を出しているんです。日本帝国主義の朝鮮支配の実態を、統計資料を通して表したものです。この人は立教を卒業してから東亜日報とか朝鮮日報の調査部長をやって、解放後は政治活動もしました。その後は北へ行って金日成大学の歴史学講座の主任をやっていましたが、最後はわかりません。立教にいる時代から在日朝鮮人の間で解放運動をやってるんです。また、ハン・チュンソップ（韓春燮）という人は学徒「出陣」で行った人で、この人はピョンヤンの師団に入りまして、そこで大量脱走をやって山に立てこもって日本軍と戦おうというプランが出るんですけど、その中に加わってるんです。この人なんかは、立教にいるころから社会主義者だったといわれています。朝鮮戦争のときに南の人と会って、南へ来ないかと言われたが、「自分は北の主流派ではないけれども、南へ行く気はない」と言って別れていったという、かなり思想的にはっきりした人なんです。本当はそういった人のインタビューをしてみたいんだけど、今のところ……、北へ行けば会えるかもしれないけど（笑）、ちょっと難しいので。だから、私の聞いているのが全部ではないんです。

研究プロジェクトの具体的課題

司会：先ほどからいろいろ「研究の課題と方向」という

ことに関しても議論が出ているんですが、この辺で少し具体的に話を進めていきたいと思います。

文部科学省の科研費に採択された研究テーマは「国際環境の中のミッション・スクールと戦争」、このセンター独自のプロジェクトとしての研究テーマは「立教学院と戦争に関する基礎的研究」ですが、それぞれの方が具体的に研究課題を抱えております。そこで、このプロジェクトではこんな問題を研究したいんだといったことをお話しいただきたいと思います。

では、その前に資料センター研究プロジェクトの概略と科研費で行う研究の概要を説明しておいたほうが良いと思います。豊田君お願いします。

豊田：昨年度から始まって現在二年目を迎えているこの資料センター研究プロジェクトですけど、今まで、全体の構成をどうしていくのかというのを大分議論してきまして、現状としては、大きくわけて総論と各論という形でまとめていこうという方向になっております。

総論の中を二つの部分に分けておりまして、一番目としては「戦争の推移と教育界をめぐる国内環境」として、「十五年戦争の政治と社会」と「戦時下の文部行政と教育」という問題を扱い、全体像をまず最初に確認しよう、と。その上で、二つ目としまして、「国際環境の変動とキリスト教」というタイトルをつけております。この中では三項目立てており、「米本国母教会の時代認識」、「政府当局の宗教政策とキリスト教界」、さらには「日本聖公会の動向」ということで、この辺は大江先生にご活躍していただく予定です。

各論のほうは、全体としては「戦時下における教育現場の諸相」という形でとらえようということで、大きく分けて三つの部分から成っております。まず一番目が「学院首脳陣の時代認識と政策決定」、二番目が「教育・研究の戦時体制化」、三番目が「戦時下の学園生活」となっております。

それぞれの中身については、まだ今後変更も出てくるかと思いますが、現状としてどういう項目が挙がっているかと申しますと、最初の「学院首脳陣の時代認識と政策決定」の中では、第1節で「学院首脳陣におけるキリスト教と国家」、第2節で「学院首脳陣の問題関心と判断」、第3節で「米国人首脳の動向と帰国問題」を扱います。そして第4節「組織の拡張を望んで」では主に「医学部設置構想と挫折」を扱い、第5節「寄附行為

変更問題の意味」では、寄附行為第二条「基督教主義」が「皇国ノ道」に変わった問題を扱い、さいごに第6節「大学存続の危機と首脳陣」ということで、「文学部閉鎖問題と理科専門学校の設立」という問題を扱うことになっております。

二番目の「教育・研究の戦時体制化」の中では、第1節「学科・カリキュラムの変遷」の問題、第2節「勤労動員と学徒出陣」の問題、そして第3節「アメリカ研究所の創設」の問題、さいごに第4節「大学教員と国策協力」ということで、特に経済学部の動向などを中心にして研究の戦時体制化を見ていくということになっております。

三番目の「戦時下の学園生活」は、第1節は「学園の規模」ということで、当時の学生・生徒・教員数がどのような状況になっているのか、第2節は「戦時下の学生生活」として、戦時下に二度ほど行われた「学生実態調査」などを中心に見ていきます。また第3節は「留学生・植民地出身学生の学園生活」として、山田先生からお話がありましたように、当時の植民地出身の学生へのインタビューなども積み重ねて、そこから何か見えてこないかを探ります。さらに第4節は「大学新聞に見る学園生活」、第5節は「課外活動の展開」―これは体育会の動向などを中心にして見ていこうと思います。おしまいに第6節「中学校の学園生活」というテーマが挙げられております。

このように大きく二つの部分から成っているわけですが、さらに最後の部分で、「立教学院にとっての戦争の意味」と申しますか、先ほどもお話がありましたように十一名の追放者を出しているということもありますので、こういった問題を扱って最終的なまとめとしたいというようなことになっております。これに、学院の組織図、学内の配置図、基本年表といったものも付録としてつけていきたいと考えております。

司会：どうもありがとうございました。これを三年ぐらいでやらなきゃいけないんですね。結構ハードな……。（笑）

豊田：ええ、そうですね。あと二年研究期間が残っております。その成果を刊行するのはその次の年を予定しております。

もう一方の、科研費による研究の方ですが、立教だけの研究というのではやはり具合が悪いので、学外の先生も加えてもう少し広い視野で、

「国際環境の中のミッション・スクールと戦争」という大きなテーマを掲げております。先ほど永井さんから紹介がありましたように、慶應の白井先生の演習で他大学の動向もあわせて研究をしているという意味で、もう先例が出始めているので、特に立教の場合他のミッション・スクールの動向を踏まえつつ、その中で立教の動きを見ていきたいということを一番大きなテーマとして挙げております。

さらにそういう研究をする中で、大江先生の話とも関係すると思うんですが、ただ立教の学内だけではなくて、アメリカ本国母教会とどのような関係を形成・維持しようとしていたのかということも見ていかないと、なかなかわからない。文部行政との関係も同時に見ていく。そういう中で立教の特色というのも見えていくのかなあというようなことが、目標として掲げられているわけであります。

司会：これもハードですけれども、今の説明を踏まえて各人がそれぞれの担当の分野でどんなことを考えているか、なるべく具体的な課題に即して語っていただきましょう。

私の担当する経済学部の国策協力の問題というのは、実は二〇〇七年に経済学部百年、立教大学百年（専門学校令による「大学」以来）を迎えます。だから、経済学部教員の私としては何とか『経済学部百年史』をつくりたい。そういうこともあって、この機会に戦前期の経済学部の教員をちゃんと調べなければいけないと考えております。

ちょっと古い経済学部の紀要を見ていて、戦時下に統制経済の特集を組んでいるのを見つけました。これには大塚久雄先生など結構著名な方も書いているんです。どうもあの時期に、経済学部として、統制経済の問題を共通の研究課題としていたように思われます。ただ、統制経済の問題も単に戦時協力だけの問題ではないわけで、そのようなこともここで見ていきたい。つまり、時局に抵抗する意思が全然なかったとは言いませんけれども、抵抗と同時にやはり翼賛というか、体制に協力していくところがあったと思うので、その辺を考えていきたいと思います。

では次に大江先生、前半部、総論のところで活躍されますが……。

大江：やはり総論ということもありますけれども、ある程度時代に対してこちらがどう認識しているかということが問題になってくると思います。

一般にこの戦時下という問題に取り組むについては、少し時代の幅を広げようということで「十五年戦争」、「アジア太平洋戦争」というふうに見るのが共通認識にもなってきたと思うんですが、自分としてはもう少し広げて、明治国家の成立以降の中でこういう問題が起こってきているというふうに位置づけて、そのなかでもどの時点から萌芽があるのか、などといった点を自分なりに位置づけたいと思っております。

一つは、戦時下ということですので、考えているのは一九二五年（大正十四年）から二六年（昭和元年）、そのあたりが一つ萌芽としてあるのではないか。ここでは何があったかといいますと、山田先生もご指摘のように、靖国神社の臨時大祭に立教は休校している。それから軍事教練を受け入れている。それから、山県雄杜三・大学チャプレンが非常に国家主義的な発言をしており、その前から小島茂雄中学校長（校長一九二一―三六年）がいろいろ発言している。大体この昭和の始まりあたりから立教の中にそういう雰囲気が強くなってきたと思うんです。

それをもう少しさかのぼって考えると、やはり教育勅語が浸透してくるのがこの戦争のときだと思うんです。教育勅語は一八九一年（明治二四年）、小学校で義務化するわけです。そうすると、それによって小学生時代に天皇を神格化した教育を脳に刻みこまれた人たちが、太平洋戦争下ぐらいになると、上限が五十歳代ぐらい。そこから下はもうみんなそういう教育を受けてきているわけですから、やはり染まっていると思うんです。もう素直に天皇のため、お国のためと入っていく場合もあれば、ごく一部には批判した人もいるだろうし、批判できずに天皇万歳と叫んだ―これは天皇制に対する呪詛みたいなものが入っているような気がするんですけれども、いずれにせよそのような国家としてのシステムが確立されていくということが、教育勅語以降あると思うんです。それが学校教育の中で特に行われていき、国民に定着していくのは日清、日露戦争で国としての意識が非常に強まって以降だと思うんです。それまでは旧藩の地域郷党社会のような意識がまだ残っていて、クニといえば藩だったわけです。明治以降それをいかにミカドの帝国として一つの国という意識をつ

くり上げるか。いろいろ制度改定をやってもなかなかできなかったことが、当時の言葉で言うと、日清、日露で勝って「一等国」になってからそういう意識に入っていったと思うんです。

ですから、そういう自然な教育が果たした役割、そのあたりは一つ前提として押さえておく必要があると思います。

その延長で、立教の中でも先ほど言ったようなことが出てくる。昭和十年ぐらいになると特に集中していくつか出てくるんですけれども、まず上智大学の問題。これは靖国神社参拝を拒否している。それから美濃ミッションの神社拒否、伊勢神宮参拝も拒否する。ちなみに、朝鮮でも神社参拝を拒否する。それで一九三八年ぐらいに、南北長老系のミッション・スクール十八校が全部廃校になってるんです。こちらのほうはかなり抵抗していますけれども。あとは、同志社の神棚事件というのがある。柔道部と剣道部の道場を新しくしたときに、従来どおり校祖・新島襄の写真像を正面の床の間に掲げる方針だったのに反して、部員が勝手に神棚を設置したんです。それを撤去しろと言った大学当局に対して問題が膨らんでしまった。

それから聖公会のほうでも、同じ昭和十年、祈祷書の中で「天皇を救いたまえ」と言ってるのに対して、これは不敬だと当局から横やりが入るんです。それは明治時代からキングの直訳ということで続いていたのですけれども、「天皇を救いたまえ」とはどういうことだというので、墨塗りではないですけれども、新しい違う句を張っているんです。

そのほかにも、聖公会のほうはいろいろある。たとえば明治天皇が亡くなると、「明治天皇奉悼礼拝式」をする。大正天皇のときも「大正天皇奉悼礼拝式」をしています。それから昭和の「今上天皇即位奉祝感謝式」なんていう式文もあります。これらは、マキム主教（ウィリアムズの後任立教学院設立者＝理事長一八九三―一九三五年）がやるようにと言っている。外国人主教であっても、何の疑問も感じていないわけです。最初に「素地」ということをお話ししましたけれども、キリスト教は大体総じてそうですが、特に聖公会だからということもあると思います。国威発揚の礼拝であるとか、天皇、皇后のためのお祈りなど、何かあるたびに自然にこういうことをやっている。そのあたりを押さえておく必要があるかなと。

あと、文部行政に関しては、宗教団体法ができて、これはいろいろ批判されていますけれども、ただ宗教団体として認められると、教団となることによって守られるという意味があるんですね。保護と監督ということで。

保護ということに関しては、要するに治安維持法違反でつぶされたりしないために教団になるという意味があるわけです。ただそれはやはり教派性というものを無視して一つになれということなので、聖公会の中ではなかなかできなかった部分もあるんですけれども、そのあたりも押さえておかないといけないかなと思います。

司会：どうもありがとうございました。では永井さん、どうですか。

永井：私はアメリカ研究所の動向を扱うことになっています。アメリカ研究所は一九三九年にアメリカ研究に関する日本で初めての研究機関として設置されました。その創設には、研究所を日米親善の礎の一つにしたいという願いが込められていました。研究所を設立する原動力になったのは宣教師たちです。具体的には、ポール・ラッシュ、オーバートン、スパックマンという、当時の立教大学の教授たちで、当初はアメリカの文献の整備をとりわけ重視していたようです。

日米関係の悪化とともに、こういった宣教師たちは一九四一年には次々に帰国し、一人残っていたラッシュ教授も日米開戦後、「敵国人」として身柄を抑留されるという事態になって、立教のキャンパスから外国人たちの姿が消えます。日米開戦後、創設時の日米親善という性格から「敵国研究」への傾斜という国策協力機関の色彩をより鮮明にしていき、研究所の性格自体も変わっていきます。

今回の研究プロジェクトでは、立教のいわば切り札、カードと位置づけられていたと考えられる研究所の活動実態を検討したいのですが、とりわけ研究の戦時体制化のプロセスと研究内容やその実効性（研究所員による研究が国策に与えた影響など）、そしてそれをどう評価するのかという問題を一次資料に基づいて検証する予定です。

なお、立教の「切り札」と言ったのは、設立された当時珍しいということもあって、マスメディアからも注目を集め、紹介されていた。立教の「売り」の一つとして対外的にアピールしていた

のです。日米戦争中はというと、外務省はもとより、参謀本部とか情報局から助成金を得ながらアメリカの雑誌の翻訳とその分析、世論動向の解析などをして情報提供する、いわば国策協力を積極的に遂行した活動実態が資料から浮かび上がってきます。立教大学が廃校になるかどうかというときにも、立教にはアメリカ研究所があって、国策に積極的に協力をしているというような方便が用いられる。そういった意味で、アメリカ研究所は創設以来、立教の「切り札」として利用されてきたのではないか、と思われるのです。

司会：では、豊田君。

豊田：はい。私の担当箇所は三つほどありまして、中の二つは基本的な情報を明らかにするものです。基本的であるにもかかわらず今まではっきりしていないという状況がありますので、まずは学科カリキュラムであるとか学園の規模といったものが戦時下どうだったのか。その事実関係を残っている資料から把握したいということがまず第一点。

それと、「大学存続の危機と首脳陣」ということで、文学部閉鎖の問題と理科専門学校の設立についても研究しているわけですが、ここも老川先生ご担当の医学部設置構想と挫折という問題とか、寄附行為の変更の問題とも絡むのですが、迎合であれ抵抗であれ、いろんな要素があると思うんですが、最終的に立教大学は「存続」という選択をしたわけです。その段階でやはり一番問題だったのは、文学部の閉鎖と理科専門学校の設立ということです。

文学部の閉鎖については、従来単に閉鎖、閉鎖といわれているわけですが、学籍を見ると、たしかに皆出征していて、在学している文学部学生はいないのですが、その学籍は依然として残っているのです。ただ、その学生がその後どうなったのか、学生部の学生調査票などを見る限りにおいては、卒業した形跡がないというようなこともあります。ただ、文学部が大学から消えたということでもどうもないようで、従来簡単に「閉鎖」と言っているようですが、状況がいろいろ複雑ですので、その辺をしっかり確認していきたいと考えております。

司会：ありがとうございました。では、最後に山田先生、いかがでしょうか。

山田：その辺混沌としているんですけど、これは別に立教学院だけではない、日本人全体の問題ですが、満州事変とか日中戦争にあんまり抵抗感なしに、すうっと協力体制に入って行ってしまう。しかし『基督教週報』なんかを見ていると、全く戸惑いがなかったとも言い切れない面を感じ取るんです。やはり中国伝道なんかをしていた人もあるせいか、この戦争で困っている中国の民衆に同情を表する動きもあるにはあるんです。ところが、それがいつの間にか東亜新秩序という美名のもとに吸収されていってしまうわけです。

結局、東亜新秩序を形成すればそういう中国の民衆の苦しみも救済されると思い込んでしまうのか何か、その辺がまだよくわからないんだけども、なぜそういうふうに吸収されていってしまうのかということですね。一つは朝鮮併合の段階で聖公会も賛成してしまっているし、明治天皇が亡くなると元田作之進も、明治天皇陛下は国威発揚なさったというので追悼文なんかを書いている。もうそういう前提もあったろうと思うんです。

それからもう一つ考えていくと、これは西原（廉太）先生の担当の問題になるかもしれませんけど、国家というのをどう考えていたのか、最後にはそこに来るのではないかと思うんです。というのは、どうも学院の首脳陣の言葉を見ていましても、犠牲という言葉が、僕から言わせるといささか濫用されているような気がするんです。

たとえばさっき言ったライフスナイダーの一九四〇年の年頭の言葉なんかを見ましても、犠牲というのを非常に強調しているんです。「犠牲の精神という此のうちに含む意味は極めて高貴なものだ。此は社会の弱者の利福鴻益のために我は多くを『与えん』とし、その為に多くを『負わん』とする決意を意味する。同胞を高め、同胞を力づけるために我が一身上の便益慰安を割譲することを意味する。」と、こう言うんです。多分これは十字架の解釈から来てるんでしょうけれどね。ところが、弱者への犠牲が一転して「国家への犠牲」にすげかえられていくんです。

その後を見ますと、「殊に、大君と国とに一切をささげ、我が生命をも惜まずに国家的聖戦の目的貫徹のため第一線に出て奮闘活躍しておる我が同胞のために以上の決意を断行することを意味する。」と記されています。いつの間にか犠牲が天皇と国家にすりかえられてしまう。

これはライフスナイダーだけではありませんで、小島茂雄もこういうことを言っているんです。「神のためにという信念から真に国家のために犠牲、献身のできる者がけだし最上の愛国者でありましょう」（『立教学院学報』第一巻六月号、一九三四年六月）と。つまり神のためにという犠牲的精神が国家のための犠牲的精神になり得るんだというので、いつの間にか国家にすりかえられてしまう。

それから滅私奉公というのも、このころ犠牲の別な名称ですが、小林よしのりが今、左翼にとっては世界が公だろうけど、おれにとっては国家が公だと言っている（『新ゴーマニズム宣言ＳＰＥＣＩＡＬ　戦争論』幻冬社、一九九八年、三四三頁）、それを思い出してしまうんです（笑）。犠牲の献身対象が何かということをしっかり煮詰めないで、神に対する犠牲と国家に対する犠牲が同質のものでさっとくっつけられていくところがある。これは、首脳陣が皆そうです。これはキリスト教の教義の解釈上の問題もあるんだろうし、日本人の伝統的な国家観の問題もあるんでしょうね。

日本語について非常に気になるのは、国という言葉はあいまいなんです。国家も意味すれば、故郷も意味する。故郷というのは非権力的なものだけど、日本だと、天皇様に弓を引いたやつは、故郷、自分が生まれたファーザーランドに対する反逆者でもあるという。本当はそれは別なんだけども、一緒にされてしまう。そういう日本的な状況とも実は絡んでるのかなとも思うんだけど、どうもその辺のことが、読んでいても僕はもやもやしてしまって。

従来、「神と国とのために」というと、この言葉が出ているところだけで議論していたんだけど、もう少し戦前までさかのぼりながら、聖公会とか立教学院で国家というのを本当にどう考えたのか、もうちょっときちっと整理しないとだめだろうと思います。

もう一つは国家との関連でいいますと、立教学院の直接的資料ではわからないんだけど、聖公会の資料を見ますと、一貫していることは、内鮮融和論というか、内鮮一体論なのです。戦時中、朝鮮人が日本国家のために命を捨てて靖国神社に祭られるとなったら、聖公会は喜んで論説を掲げてしまう（「靖国神社臨時大祭と内鮮一如」『基督教週報』第七九巻第七号、一九三九年十月二十日）。

今井寿道はちょっと違うんだけど、元田作之進に始まって戦時下に至るまでずっと、朝鮮聖公会を日本聖公会の地方部会として吸収しようという動きがしょっちゅう出てきますよね。それは教会における朝鮮併合論だと僕は思うけど、それが一貫して出てくる。

だから、朝鮮が植民地化される、日本人と一体になるということがごく当然なことだという、もうこれ常識みたいになってしまっている。それが一つは日中戦争論にもつながっていくだろうと僕は思うんです。

そういう意味で、少し長い射程の中できちっとその辺を整理し直さないと、戦時体制下、立教首脳陣の決断というのがちょっと見えてこないのではないかと感じています。これを三年間でうまく出来るかわかりませんけれども、これをやらない限りもっとわからないですから、いささか悩んでいるところです。

大江：今の先生の、国という問題は重要だと思うんです。今でいう日本国家という国と、片仮名でいえばファーザーランド、故郷という、もともと藩中心の郷党意識があります。ですから、ミカドの帝国として一つの国をつくり上げていくときに、そこ（郷党意識）で結束されたり団結されるのを非常に嫌うのです。だから招魂社でも、地方に対しては非常に制限して、靖国に集中していくんです。忠魂碑でも、宗教的儀礼はだめ、礼拝の対象としてはだめ。そういうものはみんな靖国。ですから、要するに靖国に行かないと自分の死んだ肉親に会えないという構造をつくる。地域で団結することを非常に嫌うわけです。

それは個人の家でもそうですよね。陸軍軍曹何々の墓で、家の先祖墓にも入れられずにそっちへ放置されていく。墳墓も規制するんです。ですから、礼拝対象になるものはみんな規制して、みんな靖国で英霊になる、神様になる。そして天皇がそれをちゃんと弔祭するんだというシステムをつくり上げて、日本人の心的メカニズムをそこへみんな集中させよう、させようとしている。

ですから、靖国以外のところで慰霊をすることの意味が、国家に向けての延長線でやっているということと、もう一つは、反対のベクトルでも成り立つ可能性がなくもないのではないか。国が禁止している、靖国でやることを別のところでやるということ。時代が進むにつれていろんなところ

でそういうことをやるようになっていくので、そのあたりでミッション・スクールの位置づけも時代とともにしっかり資料に基づいて押さえていく必要があるのではないかと思います。

山田：そうですね。ファーザーランドというのは国家に吸収されてしまうんです。だから、戦争末期になると米軍に投降するインテリ出身の兵隊は若干いるんだけど、投降できた人の特徴は、ファーザーランドとステートが区別できた人です。つまりステートに対する反逆はファーザーランドに対する反逆どころか、むしろ忠なるゆえんであるという整理ができた人は投降している。

ライフスナイダーもその影響を受けるんでしょうね。だって、「この千載一遇のときに当たり、諸君の仕事は、諸君が新東亜建設のために一身合体して、諸君の協力を要求する」と。新東亜建設は祖国の要求ではなくて、国家の要求じゃないですか。それがいつの間にか祖国にすりかえられて。

大江：ライフスナイダーはちょっと特殊ですよ。

山田：僕は、ライフスナイダー個人というよりも、もうこれは聖公会の方針に従って書かれているというふうに思う。ライフスナイダーもこうしないと日本聖公会が危ないというのはわかっていたのだと思います。

一九一九年にジョン・マキム、その他五人の外国人監督たちが「日本聖公会聖職信徒に送る書」で、日本では基督教と国体の関係について誤った観念があるから国民的なものの実現に努めよ、といっています。外国人監督も日本人信徒と同じく、またはそれ以上に天皇制に気を使っていますね。

大江：マキムのときからそうですね。反国体の外国人とみなされないように、というようなことを常に書簡か何かで……

山田：アメリカ人なんて相当気を使っています。

大江：私が前回の研究プロジェクトで紹介した、一九二五年の本国あての書簡でも、ライフスナイダーは、何か反対運動をするのを大分抑えて、批判していますよね。宣教師がアメリカの政府に対しても日本の政府に対しても批判や反対や、そういう運動をするときはもう少し慎重にしなくてはいけない

とか、気を使っていますよね。

山田：ライフスナイダーって、そういうところから見ていると、アメリカ人としてよりも、日本聖公会をどうするかという問題意識のほうが強いから、どうしても日本の状況に合わせちゃうのではないか。

だから、そういう意味では天皇制のインパクトというのは強いんですね。

それと、また、ファーザーランドとステートの区別があまりつかない日本的なものとダブっています。また天皇制というのは家族国家観ですから、余計ステートとファーザーランドの区別がつかないようなイデオロギー構成になっていますからね。

大江：明治になってすぐに国民を平準化しちゃうんです。「版籍奉還」「廃藩置県」で、国土を解体する。それから国民も「四民平等」にして、天皇の下で平等。神の下で人類はみんな平等だというのと似て、天皇の赤子で臣民になっていくわけです。それから徴兵制で体力を、学制発布で知力を、みんな平準化、規格化していく。知力も体力も、身分も国土も全部平たくしていったんです。

ファーザーランドの意識を消していくことをもう最初からやっているわけです。そして日清、日露で勝った後に国民の中にも国というのがだんだん印象づけられて、教育勅語のあの教育があって、どんどん暗い方向に進んでいくという感じではないですかね。

山田：それがやはり犠牲とか滅私奉公が濫用されるゆえんではないですかね。武藤安雄さんという英語の先生が、一九四〇年のあのライフスナイダーのメッセージと同じごろに「ウィリアムズ主教の生活は日中戦争以来常用される滅私奉公だった」という意味のことを言っています（『立教学院学報』第六巻第二号、一九四〇年五月）。（笑）こじつけだと思うけど。

大江：一つ逸話があるんですけど、ウィリアムズは、初代信徒・初代の学生で和田秀豊という人が戦争へ行きそうだというので、行かないように一生懸命、彼を呼んで祈祷して説得するんです。それは西南戦争の二年ぐらい前なので、和田はそんなことは意にとめずに薩摩に帰ったんです。そうしたらや

はり西南戦争が起こる。そのとき、ウィリアムズの心配そうな顔と熱心な祈祷を想い出して、参戦をふみとどまることができたというのです。

ウィリアムズは滅私奉公なんて言わなかったし、「神と国とのために」なんて全然そんなところにさかのぼれない。築地時代にはそういう標語を覚えている人はいないと、どこかに出ていましたけれども、あの言葉は池袋移転前後ですよね。

山田：そういう意味では、やはり治安維持法というのは効いているかもしれませんね。あのころから小島茂雄さんもライフスナイダーも、危険思想を防ぐにはキリスト教が役に立つんだというようなことを言い出しますよね。そういう意味で天皇制に迎合してしまっている。一種の積極的売り込みによって弾圧を避けようというか。

おわりに—研究プロジェクトの意義

司会：ありがとうございました。さて、お話は尽きませんがこのへんで、この研究プロジェクトの意義ということでまとめに入りたいと思います。

まず私から簡単に申しますと、ずっと話してきていただいたように、この研究の意義は単に立教学院の歴史にとどまらず日本の近現代史、キリスト教史、教育史の重要な問題を解決する手がかりになる。それから、何よりも立教大学でこれをやるということにおいては、「平和の碑」問題ではありませんけれども、大学において何か問題が生じたときに、正確な史実がそこになければ判断する材料がないので、そういったものを提供していくという点でも大きな意味があると思います。そのほか特にこの研究の意義ということで何かございましたら。

山田：単純化して言えば、戦前のマイナスの遺産を本当にきちっと清算しておかなきゃいけない。遅きに失したということです。もう半世紀たつんだから。いかにこっちが怠慢だったかということで……。

最近ユ・シギョン（柳時京）先生（立教大学チャプレン）から韓国聖公会の人が書いた文献を幾つかもらってきました。あれを見ていると、韓国はなかなか日本聖公会の研究をよくなさっていますね。あれは、被害を受けているからでしょうね。つまり、朝鮮聖公会を日本聖公会に併合してしまおうなんていう動きがあったわけでしょう。だから、日本聖公会のナショナリスティックな体質を

批判した学生の卒業論文とかパンフレットとか、いろいろ見せていただいて、読んでいたら恥ずかしくなってしまいました。そういうことをきちっと、まず日本人が整理しなければいけないと思ったんだけど、それはやはり聖公会の歴史も同じだし、結局学院史もそうなんですよ。

大江：もちろん反省、批判は大事ですけど、どうしてそうなったのか。それを長い歴史の射程の中で押さえ、一人一人の人間や一つ一つの組織や団体、そういったところの体験に基づいて明らかにしていく。まず賛同するんだ、批判するんだという前提ではなくて、なぜそうなったのかということを明らかにしていくという作業を通して、批判はあとから自然についてくると思うんです。例えば立教としてはこうだった、立教の学生や教員、職員はこうだったという、そういう一つ一つのことを本当にインタビューや資料に基づいて当代に生きたひとたちの心情をあらわにするということが非常に重要なことだと思います。

司会：そうですね。では、いまのまとめできょうの座談会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

（二〇〇三年一月十日収録、構成・編集部）